

---

# 天界の姫君様

蓮華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天界の姫君様

### 【Nコード】

N3556S

### 【作者名】

蓮華

### 【あらすじ】

オリジナル作品もどき。

普通の生活をしていた主人公はいつものように朝起きると父に呼ばれリビングに呼び出される。そこで父は天界の天帝でありその父の娘である自分は天界の姫であると説明される。

その天帝の位は弟に譲ったつもりだったが、その弟が父を探していて、さらに譲ったと思っていたその位は未だに父にあり、父に帰ってきてほしいと言われ仕方なく帰る事に…。普通の人間として平穏な生活をしていた主人公はこれを切っ掛けに今までの生活と百八十

度変わる事になる…。

行った世界には妖精や魔法が存在しておりまるでファンタジー世界。  
主人公はこれからどうなるのか…。

## ブログ（前書き）

思いつきで書いたため、どうなるか未だに詳しいことは考えてない  
ためどうなるかわかりませんっ（汗）

## プロローグ

夜の静寂な闇。その闇の中静かに降り注ぐ月光。

その月光は一瞬翳った。その影は人の形をしていた。

その影は二つ。それらはゆっくりと月光に背を向けてゆっくりとある家の前に舞い降りた。

下界に降りたことでその姿が露になった。

一人は胸の高さまである銀色の髪を流して身体はガッチリとしており、紫紺の甲冑を身にまとった男性。

その顔は世間一般で美形といっても過言はないほどの美麗でその瞳は紺。その紺色の瞳は目の前の一軒家を静かに見つめていた。

もう一人は紅い短髪を風に揺らしている。隣の人物同様その身体はがっちりとしており、身にまとっている甲冑の色は紅色の男性。

こちらにも美形で美麗。右手を己の頭を書きながら片目をつぶりどこか軽そうなお印象を受けた。だが目の前の一軒家を片目で見つめる瞳は強かった。

「…いくぞ」

「ああ…」

そして銀髪の青年が声をかけると短髪の青年が答えてその家に足を進める。

足を進めていく二人の目の前には玄関があり当然戸があるが、二人は気にせずに足を進める。

そして、二人はそこに戸などないかのようにスツと通り抜けたのだ。  
った。

二人が廊下を足を進めていると一つの部屋に明かりがついているのを発見した。

顔を見合してひとつ頷くとそこに足を進める。

その部屋を入るとそこにはテレビがあり、その前には机そして机の前には長ソファが一つ。

なかなかの広さがある部屋だった。

そして、ソファの後ろにして立っているのが、二人がここに来た理由であり、探し人である。

その人物は二人を見てにつこりと笑った。

「久しぶりだね。…雷希・紅炎」

部屋の主と思わしき人物。見た目は25歳くらいで黒い短髪に黒い瞳。

その顔は目の前の二人に勝るとも劣らぬほどの美麗でやさしそうな風貌。

にこにこ笑って突然の訪問者、雷希と紅炎を見つめていた。

「お久しぶりです…翡翠様」

スツと片膝をついて頭を垂れる二人に目の前の人物。…翡翠は笑う。

「もう私は君達に頭を下げてもらえる立場ではなかったはずなんだ

けどな…」

「いいえ。貴方様は我々が敬うべき存在。それは今も変わりません」

「…どういう意味だい？…私の位はあの子に全て譲った」

「…確かに貴方は紫苑様に全てを渡しかの地から離れこの地球に来了。けれど、紫苑様はそれを認めていません。そして我々もそれを認めていない」

スツと真剣な顔をしていう翡翠に二人はゆっくりと顔を上げて翡翠を見た。

「…あなたはまだこの世界の王《天帝》です。紫苑様は貴方の帰るまでの留守を預かっているだけ。そう仰っています。」

「なに？」

「ですから、早く戻ってきて下さい。あなたがいなくなつてから20年。突然いなくなつた貴方を我々はずっと探していました。」

「まさか、こんなところにいるなんて考えもつかなかったぜ」

主にたいして軽くいう紅炎にジロツと雷希は見るが紅炎は僅かに肩を竦めただけだった。

翡翠は一つため息をついた。

「あの子は…私が位なんていらないうって言っているんだから喜んで

受ければいいものを…」

「紫苑様は貴方を慕っておいでます。それは貴方が一番分かっているはずでは？」

「そうだね…あの子は昔から私を慕ってくれていた」

どこに行くにも兄上と一緒に参ります！と言ってなかなか離れなかったのをよく覚えている。

「だったら！…だったら紫苑様の気持ちもわかっていらっしやると思います」

雷希は思わず叫ぶが相手が自分の主である事にはとなり言葉を紡ぐ。

「ふう…あの子の気持ちは今も変わらない…か。」

「はい」

「…仕方がない。あの子も君達も未だに私をあきらめる気はないんですよだし…わかった。帰るよ」

「あ、ありがとうございます…！」

「あー、よかった。これで安心してゆっくり寝れるわー」

「紅炎…！」

ふざけて言う紅炎に雷希が嗜める。



「おや、どうしてだい？」

窘められてもものとせず笑う紅炎に翡翠はにこにこ聞く。

「それが、雷希がもうつるさくてゆっくり寝てられないですよー」

「おやおや、それはすまないことをしていたね」

「本当ですよー！でもこれでゆっくり寝れます」

あーよかった。と笑う紅炎ににこにこ笑う翡翠と主に対する態度を改める。と鋭い目で紅炎を睨む雷希。  
ものすごい対照的だ。

「雷希、そう怒らなくても私は構わないよ。雷希もそんな堅苦しくしなくても普通にしゃべってくれて構わないよ？」

「駄目です！！我々は貴方に使える身。そんな自分達が主である貴方にそんな軽口でしゃべるなど…許されません！！」

困ったように言う翡翠に雷希はギョツとした後、そう言った。

「本当にお前はむかつしから硬いなー。もうちょっと肩の力を抜いてもいいだろうにさー」

「お前は軽すぎるんだっ！！」

そつい言い合いする二人に翡翠は苦笑をこぼした。

それに気付いた雷希ははつとして頭を下げた。

「も、申し訳ございません！」

翡翠はにこにこ笑ったまま笑う。

「いや、気にしてないよ。雷希がそんな表情をするのが珍しくてね  
…こちらこそ笑ってしまつてすまないね」

「とんでもございませんっ！！」

再び深く頭を下げる雷希に困ったように笑った。

「それで、王妃と姫は今どちらに？」

「二人は寝てるよ。もう遅いしね」

二人はそれにすまなさそうな顔をした。

「ああ。二人を攻めている訳じゃないんだよ。二人だってわかって  
から何も言わずに私だけ来たのだから」

「でわ、また明日の朝迎えに参ります」

「うん。すまないね。」

雷希はジッと翡翠を見る。

「…もう消えないで下さい」

翡翠はそれにきよとした顔をして苦笑した。

「大丈夫。もう急にいなくなったりしないから」

そういうと二人は翡翠に一礼をするとスッと溶けるように消えていった。

## 数日前の出来事

あゝ平和です。私は今自然に囲まれています。

私は大きな木の下で寝転がっています。

平和です。本当に平和です。

鳥が囀り風が優しく吹き、花が咲きそして蜜を求めて蝶が飛ぶ。  
これ以上の平和があるのだろうかと考えてしまう程に平和です。

私が寝転がっておる木に目を向けると。そこにはヒラヒラと飛ぶ妖精が……そう妖精がいました。

だけど私はもうそれくらいのことでは動揺しません。ええしめせんとも。なにがあるうとしめせんとも！

たとえば、普通にいつものように目が覚めて下に下りたら知らない人たちがいたり、その人たちが今まで見たことないほどの美形の持ち主だったとしても、そこにいた人たちとさも当たり前かのように楽しく談笑している両親がいたとしても、自分が人間ではなく、天界の住人であるのほんとした父が天界の王で天帝だって言われたとしても、そしていつの間にか家が消えて気付けば知らない場所にいたとしても！！  
そしてそこが、魔法やら妖精やら神やら普通に生活している場所だったとしても！

動揺なんて、するもんですかあああああッあ！！！！

はああああはああゲホゲホゲホ……………もうヤダ（泣）

ことの始まりはそう数日前。

私、橘 蓮華は朝いつものように起きているものように朝ご飯を食べるために下に行く。

そこには今まで見たことがないほどの美麗で美形で綺麗な男がいました…。

「……………だれ？」

今までこの常にのほほんとした人の娘として生きたきたがこんな美麗で美形で綺麗で……………つまりは果てしないほどのイケメン2人なんて会ったこともなければ聞いたこともない。

その二人は降りてきた私に気付くと、サツと立ち上がり入り口の前で固まっている私の前まで来ると片膝を立てて頭を垂れたのだ!! それはもうどうかのお国さまの騎士の如く!!

「はっ!?!」

「お会いしたかったです! 姫様!!」

ぎょつとして下がる私にお構いなくその美麗で美つ… (以下省略) なイケメンは何がどうなっているのかが今だ理解できない (当たり前だ) 私に頭を下げたまま言いやがった!!

しかも姫だと!!? 本物の騎士かつ!!? ってそうじゃない!! 思わず突っ込こんでしまったじゃないか!!

姫!?! は!?! 私か!?! いやいや、ありえないありえない!!

勘違いだそうだこの人達はきつと間違つてここにいるんだそうにちがいない！！

というかこの騎士は何だ？誰だ？どこの御伽噺から出てきた！？

私の頭の中は今パニックつているためちよつとおかしな方向に走つていきそうになってるがそれほどのパニックしていることをわかつてほしい。というか私は誰にいつてるんだ？

動揺した頭で誰かヘルプ！！と部屋を見回す私に両親の姿が映つた。だが、しっかーし！！その両親は私を助けるそぶりもみせずにはほんと笑いながら私の方を見てたのだ！！

おい！あんた達の客だろう！だつたら責任もつてこの状態をなんとかしろ！というか説明しろ！

と思わず怒鳴つた私に責任はない。断じてない！！

目の前の御伽噺から出てきた勘違い騎士（仮）は怒鳴つた私にビツクリしていたようだ。がそんなの無視だ無視！原因はお前達なんだからな！！

「ほほーへえ」

あの後すぐになんとか両親の言葉で頭を上げて入り口をあけてくれた二人から脱兎の如く逃げ出した私は両親の説明にもう感心というか呆れというかもうこんな言葉しか出てこなかった。

えー、ようやくするとだ…。

この目の前にいるのほほーんとした父は天界という曰く神の世界？  
みたいな場所の王族の生まれで、大人になって『天帝』という最高  
権力者になったが母と出会い一緒になつて私が生まれてから、王族  
の柵みや娘と妻となかなか一緒にいれない事が嫌（こっちが本音だ  
と私は思う主に母の部分で）で弟に押し付けてこっちに來た。それ  
でずっと今まで見つからないようにしていたが、昨日ついに見つ  
かて自分が未だに『天帝』であることをしつて兄大好きだという弟  
が帰つてきてほしいとすがり付いてきたから帰ることにしたから娘  
である私も一緒に來てほしい…と。

「うん。だから帰るから。」

おほほほ。懐かしいわねえ。みんな元氣かしら？とのほほーんと笑  
つてゐる母にああ楽しみだねえ。  
と笑つ父にプチツと私の中で何かが切れた。

「ふ…」

ふざけるなああああああ！！

何が懐かしいわね。楽しみだよ！？

私は全然懐かしくもなければ楽しみでもないわあー！！  
行くなら二人でいったらいいじゃん！なんで私まで！？

しかも父の口ぶりからして私も強制的に行くことになってるしいい  
いいいい！！

「じゃあ、行こうか」

「ええ。そうね。」

と私が内心で叫びまくっているのにあれよあれよという間にいつの間にかあの騎士達に囲まれて…  
そして、気付けば見たことのないお城がありました。ちゃんちゃん。  
って終われるか！！



数日前の出来事（後書き）

初の一人称。……………楽しいっ！！（笑）

ベルサイユ宮殿！？

つづき。

私がパニックっている間に着いて浮遊感があり気付いた時に初めてみた光景は城…というか宮殿でした…。

な、な、なによこれは？！？！？！？

というかどこよここ！？

「ここはね、天界の宮殿、名前を天界宮というだよ」

私の内心の叫びが届いたのか父さんが苦笑気味に答えてくれた。

「はっ！？宮殿ですと！？」

宮殿……ベルサイユ宮殿か！？

はっ、いやまてまてそれは作り物の話であって実際そんなものがある訳が…

そう思ったがはつとする。

そうだ。そのありえないような話が今現実起きてるじゃんかよ！？

ベルサイユではないとしてもこの目の前の宮殿は現実……！！

「うん。そうだよ。今日から私達の家になる」

ちょ、ちょ、ちょっと待てー！ー！！

思わず頭をかかえしゃがみ込んだ私達の少し離れたところの後ろにいた二人の騎士（仮）が慌てて走った。

「姫様！？どうかなさいましたか！？」

「どこか怪我でもしたのか！？」

慌てている二人には悪いけど今はそんな事よりも目の前の現実が信じられずに呆然としていた。

ありえない、ありえないわ。昔から両親は色んなところでありえない人たちだとは思っていた………けど！！  
まさかこんな………ありえない。

あー、これがよくにいう現実逃避っていうやつか。ああ……。これはしたくもなるわああああ！！

ちらりと目の前を見ると私の現実逃避などお構いなくそこには相変わらずの宮殿が存在していた。

本当にありえないからあああああ！？

………もうやだ泣きたい………（泣

「大丈夫ですか？」

そして横にいる二人の騎士（仮）の存在もありえないわ………。

でもこのままでいるわけにはいかないよなあ…

はあっとため息をつくと心配そうにしている二人になんとか声をかけた。

「…大丈夫。ちょっと混乱してるだけだから…」

ホッと安心した顔をする二人に私は僅かに笑う。もうそしゃあ顔が引きつっているだろうけどね!!

「よかった…。姫になにかあれば我々は生きていけませんから」

なっ!!何この殺し文句は!?!というか生きていけないっていまだきそんな台詞を吐くやつなんか世界中探してもいないって!!

というかそこまで言わす私って…何者だよ…(汗

「じゃあ行こうか?」

そういつてにこと笑う父さんに少し殺意が沸いた!

いやいや、落ち着け落ち着け私!!

この人がこうなのはいつものことじゃないか!

ふーと深呼吸をして立ち上がる私に紅い髪の騎士が手を貸してくれた。

おお、紳士だ。

「どうぞ。」

ニツつと笑う彼の紳士さに思わず感動した。こんな男いるんだなあと（笑）

「…ありがとう」

「どういたしまして」

手を話して目の前の宮殿を見ていると目の端でスツと先ほどの彼とは別の騎士が私達を先導するように前に出て私たちを振り返った。

「ご案内します。こちらにどうぞ」

そう言うと頷く父と母、そして私を先導して歩きだした。

私はその姿を見ながら諦めのため息を吐いて足を進めた。

ちなみに紅い髪 of 騎士は私達の一番後ろから着いてきていた。

王族を正面から見てはならない。

つづき。

しばらく歩いていると見えきた入り口らしきもの。

…なんかどんどんちかくなってきている入り口は戸というより門なんですけどっ！？

そして歩いてようやく着いた目の前には扉でした・・・。

そう扉…それもかなり巨大な。目の前にそびえたつ扉は普通の扉よりざっと10倍、20倍いや、もっとあるかもしれないほどの巨大な、そう巨っつっ大！！なものだった！！

扉の一番上を見上げようとすると全っ然見えないよ！！

逆に無理してみようものなら首を痛めそうなほどの大きさだっっ！！いや痛くなるからしないけどさっ！！

これを見た瞬間私は決意した！もう何を見ても驚くまいっつと！！

「開門！！」

銀色の髪 of 騎士（仮）が言つと扉がギギギギギギギギギとゆっくりと開いた。

扉を開くとそこから見えた先には扉から数m離れた場所にある丸い

噴水。

門から足を進めるとちゃんと人が通れるように地面にレンガのような物が埋め込まれておりそこを通って人が歩けるようにしているみたいだ。

私のイメージとしたら金持ちの庭みたいなイメージだったが、その先にある馬小屋らしき小屋やその近くにある柵、そしてその柵の向こう側は草原みたいな草があつてそこに馬が数頭いた。その馬に乗っている人も数人いた。

……ちがう！なにかちがう！さすがに金持ちでも馬がいたり、こんな草原があつたりするものか！？  
いや私の中のイメージではここまでないわああああ！！

そしてありえない事にその人たちは腰に剣を刺しているじゃないかっ！！さらにありえないわ！！

ここは戦国時代か！？

あ、でも…ちらしと先導している銀髪の騎士や後ろにいる騎士を見たが彼らは腰に剣は指していない。

……なんでだ？明らかに彼らの方が偉そうな感じするのに剣をさしていない…？

疑問は色々あるが今は着いていくしかないためそのまま歩くと、馬小屋みたいな場所を通るのか歩いていると私達に気づいた馬のそばにいた人たちははつとした顔をして、敬礼をした。

はっ！？やつぱりこの騎士（仮）の人たちの方が偉いの！？  
ってかその人たち私達をみて驚いた顔をしてすごい凝視しているんだけどっ！？

なに！？

それに気づいた騎士（仮）にじろりと見られて慌てて目線をそらした！！

はあつとため息を内心着いている私にかまわずどんどん進んで彼らの前から通り過ぎるが、後ろから視線を感じる。ああ…見られてるなあ。

「…申し訳ありません」

銀髪の騎士（仮）は私達に頭を下げると突然謝ってきた。  
？？？なにを謝っているんだろう？

「かまわないよ」

両親は苦笑して笑うが彼らは納得いかないようだ。

「いいえ。たとえお許しくださいませいても王族をぶしつけに見るなんて許されません。それをあの者たちは…。本当に申し訳ありません。後できちんと教育しなおしておきます。」

「あいつら…」

目が…なんか目が怖いよ！！  
しかも後ろの方で聞こえてきた声も言葉少ない分怒りが声に出てさらに怖い！！



……黙っておこう。なんか怖いから。

父さんと母さんはそれに苦笑をこぼしてなにも言わなかった。

そのまま黙ったまた宮殿の中に入ってある部屋の前まで来た。

## 叔父さん

ある部屋で足を止めると目の前の銀髪騎士（仮）は部屋をノックした。

コンコンコン。

「…入れ」

ノックの後少ししてから部屋から声が聞こえた。

「失礼いたします」

ガチャッと銀髪騎士…は声をかけてゆつくりと扉を開く。

「翡翠様。葵様、蓮華様をお連れしました。」

そう声をかけると銀髪騎士はドアの端によって頭を下げた。

「ああ。ご苦労様」

その声に目を二人から中に目をやると、そこには一人の男性がいた。きつとこの人が父さんの弟という紫苑さんだろう。目元が父に似ている。

父さんと母さんが先に入り私が後から入ると後ろの方で戸がガチャとしまる音がした。

たぶん、騎士の二人の内どちらかが閉めたのだろう。

「久しぶりだね。元気そうでよかったよ紫苑」

「はい。兄上もご健勝でなによりです」

その声に見ると父さんが紫苑さんと楽しそうに話をしていた。紫苑さんもそれはもう本当に嬉しそうにしている。

「葵さまもご健勝で…」

「ええ。ありがとう。あなたも」

母さんにもにこやかに話す紫苑さん。

それに母さんにもにこにこ話をしている。

紫苑さんはそれから数歩後ろに下がると父さんに頭を下げた。

何事！？

「よく、よくお戻りくださいました！」

それに父さんは苦笑をこぼした。

「君が探していたんだろう？」

「はい。…兄上が「天帝」です。私は貴方以外天帝なんてありえない。そうずっと思っただけで参りました。

だからこそ私はずっと兄上の帰りを待つて、探していたのです！！」

「紫苑、私は君にすべて譲るつもりでここを出たのだよ？」

「私はそんなつもりはありません!!」

「紫苑…」

「駄目です！兄上が天帝です！私では力も器量も政もすべて貴方には劣る。兄上でなければ駄目なのです！」

「……仕方ないなあ」

父さんは苦笑を零して諦めたようにいった。

紫苑さんはそれにホッとしたように安心したように顔を緩めた。

「おかえりなさい、兄上。いえ天帝!!」

「ああ。ただいま紫苑」

そして紫苑さんは私を見た。

え…。そしてゆっくりと私に近づいてきて微笑んだ。

「君が蓮華？」

私が頷くと紫苑さんは本当に嬉しそうに笑った。

あ…。やっぱり似てるな…。ぱつと見でも似てるって思ったけど笑った顔が父さんに本当に似ていた。

それにあの父の弟だけあってかなりの美形だし…。

でもあの二人の騎士（仮）もかなりの美形だし……………なん

だ。この世界。

美形しかないのかあー！！

いや、女としては美形は好きだよ！？癒しにもなるし！！

あ、でも外にいた人達はちがったし……この人たちだけが特別なのかつ！？そうなのかつ！？なんちゅう羨ましいんだ！！

「蓮華？」

はっ！まずいまずい思わずトリップしてた。

「…いえ。なんでもありません。あの…貴方が私のその…叔父さん…ですか？」

そういいにくそうに言う私に翡翠さんはにっこりと嬉しそうに笑って頷いた。

「そうだよ。私が君の叔父だ。蓮華は覚えていないだろうけど、私は君も赤ん坊の頃をしっているよ。…大きくなったね蓮華」

「……叔父さん？」

そういつて私の頭を優しく撫でる紫苑…叔父さんになんだか照れくさくなった。

「これからよろしくね？」

「はい！」

昔から私には親戚はいないって教えられていたからこんな風に叔父さんがいてやさしくしてくれるのなんて考えてなかったから正直照れくさいけど、嬉しい。

たとえこんなありえない世界だと思ってもこれは本当にうれしかった。

## 名前を呼んで

あれから妖精や神様がこの世界に普通の存在していたり、神力という世界を守り安定させる力が父や私にあるとか言われたけど、今までそんな力使ったことないしそんなに意識していない。

けど力はちゃんとあったようで数日立って今まで見えなかったものが見えるようになり、今では妖精の姿はばっちり見えるようになった。

ここに来たときはそんなの全然見なかったのに…。

そして今日も何をする訳でなく部屋にいても暇だったため屋敷を案内された時に見つけたこの大きな木の下でのんびりと寝転がっているのだ。

この世界には神様がいらっしゃるらしいけど、宮殿から外に出たことがないためかこの宮殿の人以外会ったことはない。

でも妖精は自然があらばどこでもいるらしくこういう木や花、自然のいる場所には得に姿を見かける。

彼らは私に友好的だ。私が道に迷ったら案内してくれる。たまに悪戯をして困らせてくることもあるが本当に嫌だと思ふ事はしてこない。私と遊びたいだけらしい。

「ふあゝ…」

ポカポカした日差しに穏やかな風が私の髪を撫でていき眠気が生まれ思わず欠伸がてくる。

眠い…。ちょっとだけ寝ていいよね…。

私はおそつてくる眠気に逆らわずにそのままちよつとだけ眠る事に  
した。

もぞもぞと寝やすい姿勢を見つけるとそのまま瞼が重くなってきて

…。

z z z z z z z。

ーま…さま…

どこからか声が聞こえる…。

「ん…」

ー姫さま！



その声にボーとしながら目が覚めた私が見たのは私のすぐそばに片膝をたてて覗き込んでいるのは薄い緑の短髪と瞳の綺麗な顔の男性。起きたてで寝ぼけている私は思考が追いつかないでいた。

「おはようございます」

はっとして目が覚めた私はガバツと体を起こした。

「え！？あ……？……優翠？」

「はい。お休みでしたらお部屋でお休みください。お風邪をお引きになります」

「あー……」

空を見上げると空が赤くなっている。だいたい長い時間寝てしまっていたようだ。

冷たい風が吹きブルツツと体を震わせ腕をこすりあわせるとふわっと肩から何かをかけられた。

「え？」

振り返ると自分が着ていた服を一枚私の肩にかけてくれている優翠の姿があった。

「あ……ありがとう」

そんな事今まで誰にもしてもらった事すらない私はちょっと恥ずか

しくなった。

「いいえ。さあもどきましょう?」

「…うん」

照れる!ものすごい照れるけど、このままここにいても寒いしただだしそろそろ戻らないと心配しているだろうから戻る事にした。

私が歩きだすと私の2歩ほど離れたところから歩いてくる優翠。

優翠もあの私たちを案内してきた二人と同じく騎士だ。ちなみにあの二人の名前は銀髪の人が雷希、紅髪の人が紅炎というらしい。

優翠は優しい雰囲気醸し出しているいてその雰囲気通り優しい顔しか私は見たことない。

でも、こういう人ほど怒ったら怖そうなんだよなあ…。

それにこんな優しい人もあの人達と同じように戦ったり兵士の訓練とかするらしいから強いんだろうなあ…。

そんな事をちらりと後ろを見ながら思っていたら、バチツと目があつてしまった。

「どうかしましたか?」

ドキ

「え、いや、あの…あ!そっいえばなんで私の居場所わかったの?」

優翠ににこりとその綺麗な顔で話し掛けられて思わず心臓がドキドキとなってしまう。

だって私の周りの人達みんな美形なんだから女としては仕方がない！

私はどもりながらなんとか誤魔化そうとしてふと思いだしたことを聞いた。

「ああ。それは…」

そういつて優翠がスツと右手を上げるとそこに風の精霊達がふわふわ飛んできた。

「この子達が教えてくれたんですよ」

にこり。とそういつて笑って夕日を背にする優翠や妖精達はまるで御伽噺の景色のようだと思っただけに綺麗だと思った。

「…姫さま？」

ボーと見惚れていた私に声がかかりはっと我に返った。

「あ、そうなんだ」

「どうかいたしましたか？」

「ううん。なんでもないよ」

心配そうに話しかけてくる優翠は私が安心させるように笑うとホッとした顔をした。

「ありがとう。優翠は風を扱ったもんね。」

「ええ。そうです。おかげで姫さまを見つけることができました。  
…ありがとう皆」

そついつて風精霊たちを見ると風精霊達は嬉しそうに優翠の周りを  
クルクルと飛んでわらっていた。

。

両親や私が持っているという「神力」という力は私たちだけでなく  
優翠達騎士にちゃんと備わっているらしく、それぞれその人と相性  
のいい属性があるらしい。

優翠は「風」の属性を持っているらしく、風精霊と仲がいい。他の  
精霊達とは仲が悪いという訳ではないが風精霊は特別いいらしい。  
そして相性がいい精霊とは話ができる。他の精霊とは出来ないとい  
うわけでもないが、効きとりにくくはつきりした言葉を交わせるの  
は属性の精霊のみだという。

それは他の騎士も同じく、紅炎の属性は「炎」雷希の属性は「雷」  
であつて紅炎は「火精霊」と相性がよく雷希は雷「光の「光精霊」  
と相性がいらしい。

だが、光を属性を持つ騎士もいるらしく雷希以外にも「光精霊」と  
相性がいい騎士ももう一人いるらしい。私はまだあつたことないか  
らどんな人かわからないけど…。

みなみに、私はどの精霊の話もちゃんと聞こえるし話す事もできる。  
それは両親の力が強いからだと言う。

…それは色々助かつてるからよかったと思う。迷った時とか、迷っ  
た時とか、迷った時とか…。

……だつてここものすごい広いんだから迷うのは当たり前じゃなかー！！

「あ、そうだ！優翠！」

私が優翠を呼ぶと優翠はにこやかに返事をしてこちらを見た。

「はい」

「私のことは姫じゃなくて蓮華って名前ですって！！」

優翠は困ったように笑った。

そう、ここの人たちの殆どが私を「姫」って呼ぶ。確かに父は天帝だし、母は王妃っていう立場の人だから「姫」なのは間違っていない……けど！

私には蓮華って言う名前がちゃんとあるんだからそう呼んでつてずつと言ってるのに恐れ多いとかいつて呼んでくれない。唯一読んでもくれるの血縁者の両親と叔父と騎士の紅炎だけで、今まで会った人たちは私を「姫」と呼ぶ。  
やめてつていつてるのにー！！

「申し訳ありません。それは出来かねます」

ほら、こうやって困った顔をして断ってくる。

「なんで！？私は蓮華であつて「姫」って名前じゃないわ！」

「申し訳ありません」

そういつて足を止めて頭を下げる優翠に私は何も言えなくなる。  
名前を読んでほしいけど、そんな事をしてほしいわけじゃないのに  
…。  
だけど、今日は引けない！ずっと言ってるんだからなんとしても姫  
だけは嫌！  
でもどうしたら…。

黙って考えこんでしまった私に優翠は困ったような顔をしている。

「あ？なにしてた二人とも？」

その時宮殿の中の中途半端な場所で足を止めていた私たちの前にこ  
ちらに歩いてきていた紅炎は不思議そうな顔をした。

「あ、紅炎」

私は名前を呼んでくれている紅炎ならもしかした優翠を説得してく  
れるんじゃないかと希望を持って紅炎に説明をすることにした。

「あのね…。」

説明すると紅炎はほーと頷くとニツと笑った。

「だったら俺からいい案があるぜ？」

「へ！？どんなつ！？」

その言葉に一体どんな案があるのか知りたくて聞き返すと紅炎は優  
翠に向き直った。

「優翠。お前名前呼びたくねえの?」

「っ!!ちがいます!!」

優翠は紅炎の言葉に慌てていう。

「じゃあ、姫にそんな口は利けないって?...その姫がそれを望んでいるのか?」

優翠はそれにうつつと口ごもった。

「ですが...」

「じゃあ、こうしたらいい。蓮華は名前を読んでほしい。けど優翠は姫を呼び捨てなんて許されないと思ってる。.....だったら「蓮華様」って呼べばちゃんと敬称ついてるし、名前は入ってる。これならお前も呼べるんじゃないか?」

なるほど!それなら姫よりまだいいかも。

...様つけられてるのは気になるけど、まだ姫よりかはいい...

「...」

眉を寄せて深く考え込んでいる優翠を見る私に紅炎はニッと笑う。

「な?これならいいだろ?あ、俺は蓮華って呼ぶぜ?」

「うん!」

そして優翠を見るとフワツと笑うと私を見た。

「わかりました。ではこれからは蓮華様と呼ばせてもらいます」

「あ。うん！！ありがとう！」

それに嬉しくなって満面の笑みで私は優翠に笑みで返した。  
それを見た優翠と紅炎は目を細めて優しく笑った。

こうして優翠に名前を呼んでもらうことに成功した私は優翠と紅炎と一緒に部屋に案内されたのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3556s/>

---

天界の姫君様

2011年4月16日00時07分発行